

時代を切り拓いた 九州の女性たち

時代を切り拓く女性たちの物語は、
いつの時代も人々の心を揺さぶってきました。
日本の近代化が大きく進んだ明治時代。
文明開化の波が列島を揺さぶる中で、
「女性にはできない」とされた壁に挑み、
自らの力で道を開いた女性たちがいます。
声を上げることも、学ぶことも、まだ容易ではなかった
その時代に、彼女たちは何を信じ、どう生きたのか。
今回は、福岡・熊本・鹿児島にゆかりを持つ
三人の足跡をたどります。

取材協力

- ・熊本県益城町教育委員会
- ・鹿児島県
歴史・美術センター黎明館
- ・中村学園大学

使命に生き 扉を開けた三人

女性解放に生涯を捧げた熊本の矢嶋楫子、帝国大学への門をこじ開けた鹿児島丹下梅子、食と教育で人を育て続けた福岡の中村ハル。生まれた土地も、歩んだ道も、それぞれ異なる三人ですが、どの人生にも共通するものがありました。逆境をも力に変え、自らの信念を曲げることなく、後に続く女性たちのために時代の扉を開け続けたこと。華やかな功績の裏には、孤独や苦勞、それでも前へ進み続けた日々がありました。三人はそれぞれ、どんな時代を生き、何を信じて道を切り拓いたのでしょいか。その足跡を、一人ひとりたってみます。

矢嶋 楫子 Yajima Kajiko



熊本 | 女性解放運動の先駆者
1833 (天保4) ~ 1925 (大正14) 年

“使命とは、命を使うことです。
自分の命は、自分で使うのです”

一夫一婦制、婦人参政権、禁酒、廃娼運動など、多くの活動に関わり一途に女性の地位向上を目指す

肥後の惣庄屋の六女として生まれた楫子は、25歳で結婚するも、夫との関係に悩み、ついに離縁状を叩きつけて実家へ戻ります。当時、女性が自ら離婚を求めることは容易ではなく、世間の目は冷たいものでした。それでも彼女は折れませんでした。39歳のとき、病に倒れた兄の看病をきっかけに上京し、みづから「楫子（舵を取る者）」と名を改めて新たな人生を歩み始めます。やがてキリス

ト教の信仰に出会い、1886年には日本キリスト教婦人矯風会を設立。廃娼運動や一夫一婦制の実現、婦人参政権の獲得に向けて、生涯をかけて声を上げ続けました。89歳のとき、10万人の女性の署名を携えてワシントン平和会議へ出席。その姿は国内外に大きな感動を与えました。93歳で天寿を全うするまで、「使命とは、命を使うこと」という信念を体現し続けた生涯でした。

丹下 梅子 Tange Umeko



鹿児島 | 女性科学者の先駆け
1873 (明治6) ~ 1955 (昭和30) 年頃

“閑古鳥呼べば答えるものなう”
梅子が遺した一句。
どれほど孤独な道でも、呼び続ければ必ず応えがある——
その信念が、生涯の研究を支えました。

日本で初めて帝国大学に進み、
女性たちの科学への道を切り拓いた人

鹿児島市金生町の裕福な商家に生まれた梅子は、幼いころに右眼の視力を失うという困難を経験します。しかし、その逆境が向学心を曇らせることはありませんでした。師範学校を卒業後、小学校の教壇に立ちながら学びを続け、日本女子大学校で科学への探究を深めます。そして40歳のとき、東北帝国大学の入学試験に合格。1913年8月21日にその合格が発表されると、社会に大きな衝撃を与えました。これは「日本で初めて帝国大学に進学した女性」の誕生として知られ、後にこの日は「女子大生の日」として記念されることとなります。

その後、梅子は渡米し、ジョンズ・ホプキンス大学で博士号を取得。帰国後は日本女子大学教授として栄養学研究に打ち込み、多くの論文を発表しました。1940年には東京帝国大学から農学博士号を授与されるなど、その研究成果は高く評価されました。78歳まで教壇に立ち続けた梅子。その生涯は、「女性に学問は不要」とされた時代の常識を、静かに、しかし確かに塗り替え、後に続く女性たちの科学への道を切り拓いた歩みでした。

中村 ハル Nakamura Haru



福岡 | 料理教育と人教育を実践
1884 (明治17) ~ 1971 (昭和46) 年

“努力の上に花が咲く”

生涯を教育と料理研究に捧げ、
社会を変えた人

幼いころから股関節脱臼による身体の不自由を抱えながら、ハルは教師として懸命に働き続けました。そのかわり、肺結核を患った弟・関次郎の療養費を12年間、自らの給料から払い続けました。1921年に弟が逝去したとき、ハルはひとつの区切りを迎えます。そして、教育への情熱を胸に抱き、その生涯を教育と料理研究の道に捧げることを決意します。

戦後、食糧難が続く日本で、ハルが力を注いだのは「食を通じた人づくり」でした。栄養学という科学の知識を、難しい言葉ではなく、家庭の母親たちに届く言葉で伝えること。それが、子どもたちの未来を変えると信じていたのです。60代にして中村学園を設立し、晩年まで車椅子を使いながらも教育の現場に立ち続けました。教育の道70年、料理研究の道50年。身体の不自由も、長年の苦勞も、すべてが使命への栄養源となった——ハルの生涯は、そう語りかけてくるようです。教育への思いは、彼女が遺した言葉の中に、今も生き続けています。